

相模経済新聞

THE SAGAMI KEIZAI

昨秋、日相印刷（相模原市南区）が刊行した『仙客亭柏琳翻刻全集』（A4判351頁）により、江戸末期相州磯部村（現・相模原市南区磯部）に生きた農民戯作者の作品の全容が明らかになった。市の文化的集積に貴重な一ページが加わったと言える。発刊から180年余りを経て発掘された郷土の文化遺産に親しみを深めてもらうため、3つの作品それぞれの骨子と成立の背景などを紹介する。

（編集委員・戸塚忠良）

仙客亭柏琳の戯作（後）

③紫房紋の文箱

表題に「井筒藝子 八 百屋娘」とある通り、京都六條の重井筒屋の芸妓お房と、地震で被災して鎌倉の寺に仮住まいしている八百屋の娘お七が、それぞれの恋物語のヒロインとして描かれる。

お房は主家の家宝を巡る2人の侍とその取り巻

きたちの虚々実々の駆け引きに巻き込まれつつ、自分の愛する人への真実を貫く。お七は年の離れた商人との祝言をきらつて小姓吉三と寺を逃げ出し、道行きの運びとなる。

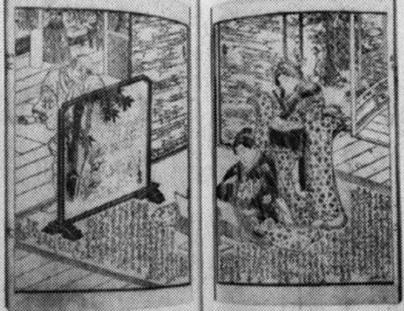
ヒロイン2人にお房を助ける娘、口やかましいその母、お七の父親と丁稚、酒好きで年寄り権助などがからむ波乱に富んだ筋書きで、三々九度をもじった盃のやりとりの場面は読者の爆笑を誘う。最後に登場人物が一堂に集い、意外な正体が明かされる仕掛けだ。

巻頭に種彦の口上は無いが、作中、お七と吉三が同じ夢をみる一段については、「この浄瑠璃は作者の稿本ではとても長く、三葉では収まりがたいたので省略したが、この一段について私は添削していない。柏琳の真面目（しんめんもく）である」と記している。

当時の第一級の作家の批評眼から見ても、柏琳の稿本に瑕疵の無い文章が含まれていたことを示すあかしと言えよう。

※原本は早稲田大学図書館蔵書。歌川貞秀画。天保7年（1836）刊。

2人の恋物語を描いた「紫房紋の文箱」



仙客亭柏琳(荒井金次郎)は、日相印刷創業者(会長:荒井 徹、社長:荒井 功)の5代前の先祖となります。